

子どもたちの  
「豊かな学び」のための

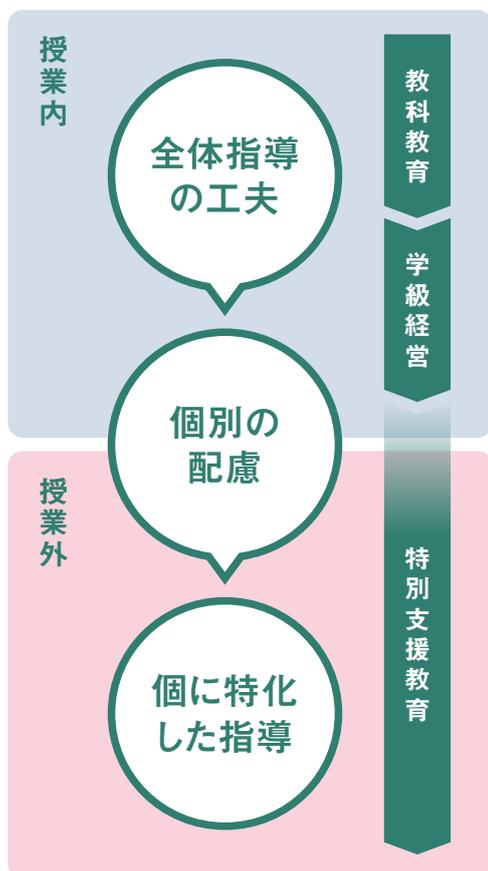
# ユニバーサル デザイン教育



昨今の学校教育を取り巻く環境変化を踏まえ、すべての子どもに適切な教育を行う必要性がますます高まっています。今回は、近年注目を集めている「ユニバーサルデザイン教育」について見ていきます。

取材・文 ● 甲斐ゆかり (サード・アイ) | イラスト ● あきんこ

## ユニバーサルデザイン教育の展開



### ユニバーサルデザイン教育とは

2006年に国連総会で採択された「障害者の権利に関する条約」において、ユニバーサルデザインは、「調整又は特別な設計を必要とすることなく、最大限可能な範囲で全ての人が使用することのできる製品、環境、計画及びサービスの設計をいう」と定義されました。この考え方を教育に反映したものが、ユニバーサルデザイン教育（以下UD教育）です。

日本では、2007年に特別支援教育に係る学校教育法の一部が改正・施行され、それまでの特殊教育から特別支援教育への転換が行われました。これにより、小・中学校における学習障害などを含む障害のある児童生徒に対して適切な教育を行うことが規定されました。

現在、UD教育の実践は、特別な支援が必要な子どもだけでなく、通常学級の授業の質をより一層向上させる可能性が

あるとして、授業づくりを見直す目的から、様々な実践が重ねられています。以下、UD教育における「授業UD化」について紹介します。

### ユニバーサルデザイン教育を支える3つの柱

UD教育においては、子どもの反応に応じて、授業や、それ以外の場面でも効果的な指導を行う必要があります。

まずは通常の授業で効果的な指導を行い（教科教育）、それだけでは充分でない子どもに対しては、学級内で補足的な指導と配慮を行います（学級経営）。さらに補足が必要な場合は、学級の内外で補足的・集中的に、より個に特化した指導を行っていきます（特別支援教育）。

このように、UD教育は、教科指導法、学級経営、特別支援教育がそれぞれの専門性を発揮しながら、統合化して展開されています。

# ユニバーサルデザイン教育を理解するときに陥りがちな誤解

UD教育＝教室環境に関する工夫である

という誤解



黒板の周辺をすっきりさせる、余計な刺激を減らす、ICTを使う、ワークシートを使うといった教室の環境を整えることだけではなく、授業そのものを工夫することが大切です。

UD教育＝「○○スタンダード」である

という誤解



スタンダードの中には、教室の環境や指導方法をひとつに統一するという考えのものもありますが、それらは、多様な学びを保障する本来のUD教育の意義からは遠ざかってしまいます。

UD教育＝特別支援教育あるいは個別支援である

という誤解



障害のあるなしにかかわらず、通常学級の授業で、すべての子どもたちがわかりやすい授業を目指すのがUD教育です。

## 授業UD＝すべての子どもたちにとってわかりやすい授業

UD教育に取り組む際、間違っていないのは、UD教育における授業デザインの手法（授業UD）は、あくまで手立てであって、それを行うことが目的ではないということです。クラスの様子や子どもの状況はそれぞれ違っているため、それに合わせてどのような手法を取るか、子どもたちを前にした教師が工夫する必要があります。

授業UDの対象は、学びにつまずきのある子どもだけではなく、したがって、単に授業を簡単にしたり、レベルを下げたりするのは不十分です。

クラス全員を同じように大切にできる授業をデザインしていくことが重要になります。

また、教科教育・学級経営・特別支援教育の3つの柱が切れ目なく連続していくことも大切です。特別な配慮が必要な子どもたちへの指導は学級経営的な視点で行いますが、教科教育の目的は、その日の1時間の授業の中で達成する必要があります。特別支援教育の視点に偏り、教科教育の視点が抜け落ちないようにバランスをとります。

## UDの掲げる指導の理念を日常の実践に生かす

授業UDに関する実践例は数多く積み重ねられており、実に様々な指導方法が見られます。それは、授業UDとは、指

導の方法論ではなく、指導の理念を指すからです。

UD教育には、必ずこうしなければならないという画一的な指導法は存在しません。いくつかの視点に基いて授業をつくることはありますが、それが絶対的なものではなく、一人ひとりの学び方に応じた個別指導も重要になるとされています。

また、子どもが自分に合った学び方を選べる学習環境づくりも大切です。このことが、子どもたちの多様な教育的ニーズに対応することにつながります。

今後、障害の有無にかかわらず、学びの機会を保障するためにも、UD教育はますます広がっていくことが予想されます。次のページからは、実践例を紹介します。



# 実践者から学ぶ



お話をうかがったのは

Munezane Naoki  
宗實直樹先生

関西学院初等部教諭。兵庫県姫路市公立小学校を経て現職。研究主任と社会科主任を務める。社会系教科教育学会、和文化教育学会、日本授業UD学会、社会科授業UD研究会所属。授業研究会「山の麓の会」代表。著書は『宗實直樹の社会科授業デザイン』（東洋館出版社）他、共著、論文多数。ブログ「社会のタネ」(<https://yohhoi.hatenablog.com/>)では社会科理論や実践を発信している。

UD教育の理念を理解し、取り組んでいくには何が大切なのでしょう。  
「豊かさ」のある授業をめざして社会科授業UD化の実践を積み上げて来られた、  
関西学院初等部教諭の宗實直樹先生に伺いました。



## ①スパイラル化

社会的事象を通して得た  
概念的知識を、別の  
社会的事象にも重ねさせること

例：社会的事象を重ねる

低地に住む人々は、地形の特色に合わせたくらしや産業の工夫をしている。

高地に住む人々は、地形の特色に合わせたくらしや産業の工夫をしている。

地形の特色を生かしてくらしや産業の工夫をしている。

その土地の自然条件を生かして  
くらしや産業の工夫をしている。

温かい土地に住む人々は、気候の特色に合わせたくらしや産業の工夫をしている。

寒い土地に住む人々は、気候の特色に合わせたくらしや産業の工夫をしている。

気候の特色を生かしてくらしや産業の工夫をしている。

スパイラル化とは、ある学習で学んだ見方・考え方を、ほかの学習で意図的に使ってみる機会を設け、意図的に繰り返すことです。

そうすることで、ある社会的事象についての本質的な理解を促し、それを他の似た社会的事象に転移し、本質的理解（説明力・汎用性の高い概念的知識）を獲得することをめざします。



解説

目の前の子どもをみて  
それに合った手立てをしていこう

授業UDデザインには、数多くの授業での（バリア）を除く工夫の視点がありますが、例えば社会科授業UDの場合は、全ての子どもが「社会的な見方・考え方」を働かせながら問題解決できるようにすることが目的です。

授業UDは「この手法をやっておけば成立する」といった性質のものとは違います。1時間の授業の中で、どのように展開すれば子どもたちが学びやすいか、目の前の子どもたちに合わせた工夫が必要となります。

もっとも陥りがちな失敗は、書籍や研

究事例で紹介された内容を、自分の学級にそのまま当てはめてしまうことです。学級経営の仕方は、担任のもつ特徴や子どもたちの様子によって変わります。前提条件が違うのに、本に書かれたことを再現しようとしても、おそらくうまくいかないでしょう。成功事例にこだわるあまり、目の前の子どもたちを置き去りにしてしまわないように気をつけたいですね。

授業UDに限らず、いちばん大事なことは、数ある指導はすべて子どもたちのために行われるということ。あらかじめ決められたパッケージに子どもたちを合わせるのではなく、子どもの現状に合わせて授業のデザインを工夫していくことです。そのためには、子どもの性質やクラ

スの雰囲気をしっかり見取り、個々に合った学び方を考えていくことが求められます。

GIGAスクール政策によって一人一台のタブレット端末が普及したことで、子どもを見取るときの工夫の余地が広まりました。私はつねにiPad miniを持ち歩き、子どもの変化をそこに集約・整理しています。学びの跡をデータとして残すことは、自分の授業改善にも大変有効です。

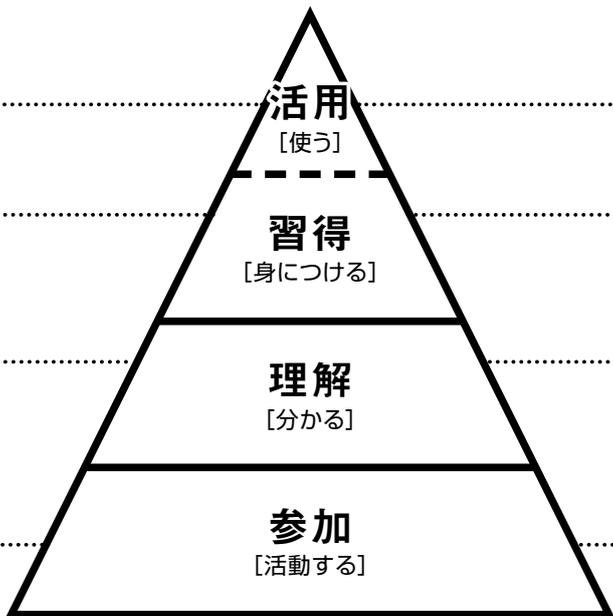
授業ごとの技法の工夫例はたくさんありますが、それらは授業UDのねらいを達成させるための「手段」であり、「目的」ではないことを、まず押さえてほしいと思います。

# 授業UD化モデル

(日本授業UD学会より)

発達障害のある子もつ授業における〈バリア〉となる特徴

- 抽象化の弱さ
- 般化の不成立
- 記憶の苦手さ
- 定着の不安定さ
- 理解のゆっくりさ
- 認知のかたより (視覚・聴覚)
- 複数並行作業の苦手さ
- 曖昧なものへの弱さ
- イメージすることの苦手さ
- 学習スタイルの違い
- 状況理解の悪さ
- 見通しの無さへの不安
- 関心のムラ
- 不注意・多動
- 二次障害



授業における〈バリア〉を除く工夫の視点

- 機能化 (日常生活での実用・発展的課題・発想の獲得)
- 適用化 (応用・汎用)
- ① スパイラル化 (学年・単元間・教科間の重複の意識)
- ② 共有化 (感覚の活用 (動作化/作業化))
- ③ 視覚化
- ④ スモールステップ化 (展開の構造化)
- ⑤ 焦点化
- 時間の構造化
- 場の構造化
- 刺激量の調整
- ルールの明確化
- クラス内の理解促進

教育方法の工夫

指導方法の工夫

## ③ 視覚化

効果的に視覚的情報を用いて  
子どもの思考を可視化し、  
概念的知識を獲得させること

例：資料の見せ方

- ① かくす (注目させたい部分をかくす)
- ② ダウトをつくる (資料中に誤りを入れる)
- ③ 並べる・比べる (複数を比較する)
- ④ アップにする・ルーズにする (拡大・縮小)
- ⑤ 止める (時間をとって注目させる)



「視覚化」は、説明や指示などを板書や絵、写真、映像などによって視覚的に示すことです。また、子どもの思考を可視化することも含まれます。

これによって、資料のどこを見ればよいかわからない子ども、友達の発言の意味がわからない子どものもつ困難さの克服につながります。また、子どもの問いや思考、対話を促し、教科の見方・考え方を働かせることにつながります。

解説

## ② 共有化

一人の考えのよさを全員に広げ、  
全員でよりよい考えを  
つくり出していくこと

例：共有化の方法

再生	「〇〇さんが言ったことをもう一度言える人？」 「〇〇さんがとっても大切なことを言ってくれました。〇〇さんの発言の大切な部分を隣の人と伝え合いなさい」
継続	「今、〇〇さんが『～だけど』と言いましたが、〇〇さんがその続きにどんなことを言おうとしているか予想できる人？」
暗示	「〇〇さんがよいことに気付いています。今から〇〇さんにヒントを出してもらいます」
解釈	「今、〇〇さんが～と言った意味がわかりますか？」



「共有化」は、子どもがペアになったり、グループになったりして考えを伝え合ったり、教え合ったりすることです。これにより、理解の仕方がゆっくりな子どもは、他の子どもの考えを聞きながら理解を進めることができます。また、理解が早い子どもは、他の子どもに考えを伝えることで、より深い理解につながります。「学級のみならずと学ぶと、より学びが深くなる」と実感し、ともに学ぶ喜びを得ることができます。

解説



◀「仲良くなりながら、わかる・できる！」をめざす具体的な活動内容や問答を紹介。明日の授業からすぐに実践できます。

『社会科授業のユニバーサルデザイン』  
著：村田辰明(東洋館出版社)



◀UD教育の全体像や、UD教育とUDの授業デザインの違いを説明しています。授業UDの全体像が体系的に理解できます。

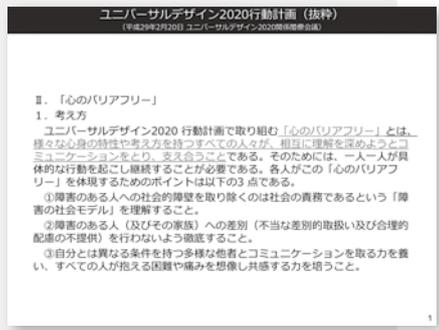
一般社団法人  
日本授業UD学会  
<http://www.udjapan.org>

▶学習指導要領を読み込むときに。授業改善のヒントにも。



『小学校 新学習指導要領 社会の授業づくり』  
著：澤井陽介(明治図書出版)

▶2020東京パラリンピックを契機として、ユニバーサルデザインとは何かを、私たちの生活に即して説明しています。



文部科学省  
[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/tokubetu/material/\\_icsFiles/afiedfile/2018/02/13/1401341\\_3.pdf](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/material/_icsFiles/afiedfile/2018/02/13/1401341_3.pdf)

### ⑤ 焦点化

学習内容を絞り、ねらいを明確にすること

例：まとめの書き方

「ゴール」を子どもの発言レベルで設定

婦恋村では、夏に多くのキャベツを栽培している。 [事実的知識]

高い土地による涼しい気候を利用することで夏にも栽培ができ、他の産地と出荷時期をずらすことで、高い値段で売ることができる。 [概念的知識]



「焦点化」とは、1時間の授業で何を教えるか、その焦点を絞ることです。これによって、教科ごとの見方・考え方やねらいを明確にし、教師が何をどのように教えればよいかをはっきりさせます。また、子どもたちも何を学んでいるのかがわかりやすくなります。

焦点化は、教師や子どもがもつ困難さを解消するための第一歩と言えます。

解説

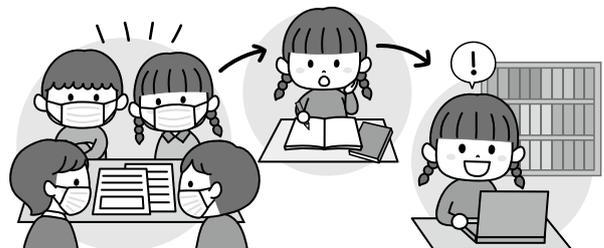
### ④ スモールステップ化

学習活動を細分化していくこと

例：「調べ方」のスマールステップ化

- 教師が提示した一つの資料を全員で読み取り、調べる
- 教師が提示した複数の資料から選択して調べる
- 教科書、資料集の中から自分で資料を探して調べる
- 図書館の本やインターネットの情報などで調べる

➔ 教材や子どもの実態によって臨機応変に変える



スマールステップ化とは、目の前の子どものもつ困難さに合わせて、学習のステップを細分化していくことです。授業の目標達成に向けて、学習活動や発問を細かくすることで、全員が授業に参加したり、概念的知識を獲得しやすくなります。

スマールステップ化の対象として、発問、調べ方、まとめ方などがあります。

解説

# 授業づくりのために意識したい4つのポイント

授業UDに取り組む際、先生が心がけていることをおたずねしました。

## 1 授業のねらいを絞る

社会科で言うと、問いをどう立てるかがいちばんのポイントだと感じています。学習の課題をどう設定して、授業時の問いをスムーズに作っていくかが、子どもたちの授業においても思考の流れに大きく影響してきます。

技法に走りすぎてしまい、1時間の中でたどりつくねらいが明確でないと、授業がぶれてしまいます。ですから、必ずたどりつけたいことを、子どもの発言のレベルにまで言語化して設定しておくようにしています。

## 2 子どもの「つぶやき」を引き出す

授業中は、子どもの発言を拾い、それらをつなぐことで授業を組み立てていきたいと思っています。そこで、子どもたちが自由につぶやける雰囲気づくりを大切にしています。

また、子どもたちの意見を板書するとき、「○○さんの発言で～」と、発言に添えて名前を書くといった工夫もしています。すると、「さっきの○○さんの意見が～」と、発言を引用することで、子どもが次の意見を言いやすくなる効果があります。

## 3 いろいろなものを見て世界を広げる

私はもともと、いろいろなモノを見ること（鑑賞）が好きです。社会科は、産業や文化、伝統工芸など、人が生み出すさまざまなモノとのつながりが随所で出てきて、それらを見る機会に恵まれています。

社会科は、フィールドワークを通して多くのものを発見し、学びを深めていく教科です。自分のライフスタイルにも合っている部分が多いので、授業の幅を広げるうえでも、「見ること」を続けていきたいです。

## 4 子どもを「感化させる」

子どもたちが、社会科にいまひとつ関心をもてない原因のひとつには、社会的事象に興味をもてない・もちにくいことがあると思っています。これについては、教師が働きかけて「感化」していく必要があると考えます。

最近では、新型コロナウイルスに伴うオリンピック東京大会での無観客開催を伝える新聞記事を掲示しました。子どもたちはその是非について積極的に意見を述べ合っていました。子どもたちが関心をもてる環境作りも大事だと思います。

「子どもたちには豊かな授業によって豊かな心をもち、豊かな人生を送ってほしい」

大学では美術を専攻し、美学と絵画を学んでいました。社会科を担当することになったのは、新任時に赴任した離島の小学校で、教科担当の先生がいなかったことがきっかけです。

研究授業の発表を控え、数多くの資料にあたる中で、授業UDの第一人者である村田辰明先生の実践が目にとまりました。

そこに書かれていた子どもの困り感は、私自身の、「社会科の授業をどうしようか」という心情にそのまま当てはまりました。「社会科を苦手とする自分が読んでもみて良いと感じるなら、きっと子どもにも良い反応があるはずだ」。実践を始めるも、まさにその通りでした。



今は私自身も社会科が好きで、その面白さにひかれています。その気持ちを、子どもたちも感じてくれたら嬉しいです。今、大学院で美術を改めて学び直しています。アートはいろいろな教科の「接着剤」となる存在であり、今後はアートの視点をもっと必要とされてくると感じています。この学びを通して人の営みを見るうえでの柔軟性もち、教師として自分自身の美意識を鍛えていきたいです。

子どもたちには、豊かな心をもって豊かに生きてほしいという願いをもっています。そのために、見えないものを大切にした、豊かな授業をしていくつもりです。